



## 看護学教育研究共同利用拠点としての事業活動

当センターは、1982年4月の設置以降、看護学教育の質向上のための全国共同利用拠点として、活動してきました。社会環境、看護学教育および実践の場の状況に沿って、調査研究や専門的研修を実施しています。状況の変遷に即して事業内容を改変する際、一貫して「教育・研究・実践をつなぐ」ことを大切に、実行可能性の高い看護の価値の追究、利用者個人の力量開発支援、および看護系大学や地域の関連施設の機能の充実、さらに各地域および全国の看護の価値の向上、あるいは新たな価値の創造をめざしてきました。

拠点としての機能発揮に関する、こうした考え方と多様な事業の構成の現状について、より多くの方々に理解され、活用されるように、本年もニュースレターを作成しました。

旗艦事業の「CQIモデルの開発と活用推進」では、全国調査や事例研究をもとに、実行可能性の確保に努めながらモデル試案を作成し、看護学教育ワークショップにて、全国の看護系大学参加者に活用していただき

ました。あわせて、全国の看護系大学が、国民と共有している「学士課程教育においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」を、どのように教育の質改善に活用しているか、について、実態調査(2015-17年度、文部科学省委託事業)をもとに、卒業時到達目標の達成状況の評価に関する具体的な方法を提言しました。2018年度は、看護系大学が、社会の変化に即して、臨地実習体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革、実施および評価するしくみをどのように構築するか、に関して方略を提言できるように、多様な地域や設置主体の看護系大学と共同研究を開始しました。

今後も、当センターでは、各看護系大学における学士課程の教育の質保証、地域の関係機関の教育力および看護の価値の創造を支援することにより、社会の多様な課題を自律的に解決しうる看護職の基盤的能力の習得や大学院教育の質保証に貢献したいと考えています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本センターでは、拠点としての機能強化を図り、看護学教育に関する国内外の動向を共有し、各大学の教育の質改善のため、ホームページでの情報発信はもちろんのこと、個別指導や情報交換できるよう、下記のようなコンテンツ等を配信しております。

- ・FDマザーマップ・支援データベース  
(看護系大学のFDを支援するFDプランニング支援データベース)
- ・組織変革型看護学職育成支援データベース  
(教育-研究-実践をつなぐデータベース)

また、メーリングリストを改め「拠点インフォメーションメール」とし、看護系大学等との連携・協働のための情報発信力向上に努めております。受け付けは随時行っておりますので、担当窓口部署、窓口担当者名を記入の上、件名を「(〇〇大学) 拠点インフォメーションメール登録申し込み」とし、kango-cqi@chiba-u.jpまでお申し込みください。



<https://www.n.chiba-u.jp/center/>

## 「CQI モデル開発と活用促進事業」 についての紹介

看護はいつの時代においても、何処でも必要とされる専門職です。しかし、時代・社会の変遷に伴い、なすべき役割と支援の在り方をイノベーションする必然性が生じてきます。少子高齢化が進んでいく日本社会において、国がめざす「効果的・効率的な医療提供体制の構築」の課題を解決するために、地域で人々のLife(生命・生活・人生)を支える看護職を輩出できるように、当センターでは、平成28年度から、看護学教育の継続的質改善(Continuous Quality Improvement:CQI)モデルを開発し、それを活用することにより、全国の看護系大学の自律的・持続的機能強化を支援する事業に取り組んでいます。

平成28～29年度(第1期)では、Webによる全国調査を行い、〈看護学教育のCQIモデル開発のための実態解明〉を実施しました。そして、看護系大学FD企画者研修をスタートし、5大学が参加するCQI推進の前向き事例研究に取り組まれました。続く第2期は、〈看護学教育CQIモデル開発〉に取り組み、その成果を踏まえて、「看護学教育の自律的・継続的質改善の戦略を練る」というテーマで、29年度の看護学教育ワークショップを開催しました。ワークショップでは、「FacultyをDevelopmentすることを意識すること」、「Peer-cooperation推進による日常教育実践CQI」などが重要であることが明らかになりましたが、参加者からは「CQIに向けたエネルギー枯渇の現状」との声も聞かれました。即ち、看護系大学教員はそれぞれ、求められている教育活動に多忙な日々を送り、エネルギーが枯渇し、課題を解決するためになかなか仲間同士で語り合う余裕がなく、組織の現状・課題の共通認識を持つことができていないことがわかりました。

これを受けて、図1.2に示す看護学教育CQIモデルver. 1を開発しました。図1は看護系大学教員としての自己の立ち位置を見極めるための構造図です。看護系大学は社会・グローバルに存在する医療専門職を育成する1つの学術組織であり、大学を取り巻く地域の人口構成、経済発展などの現状の影響を受けながら、教育を行っています。教員と

学生は看護の対象となる地域で暮らす人々の健康を支えるために、どのような看護の提供が相手のニーズを満たすことができるのかを教授・学習過程を繰り返し、探求し続けます。そのため、地域の保健医療福祉機関と連携しながら、学生の学びの場を設け、学内で教授・学習したことを人々のLife(生命・生活・人生)を支える自律的看護職を目指すことに到達できるのかを検証し、常に3Pの在り方を振り返り、自大学の管理運営が次世代の発展につながるよう邁進します。

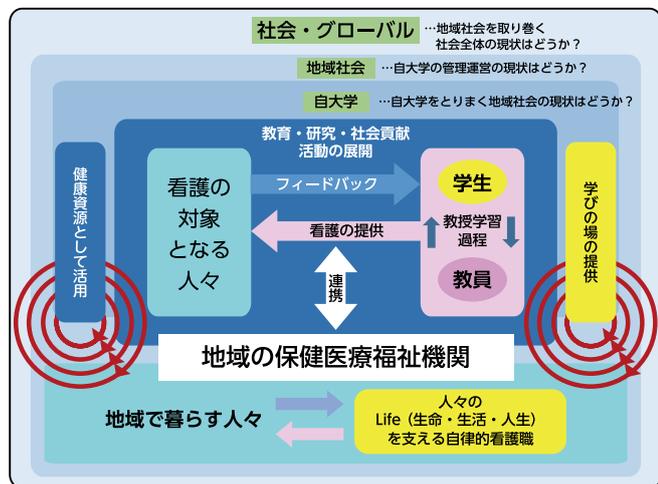
図2は図1で自己の立ち位置を定めた上で、看護学教育の継続的質改善に向かう思考の方向性をあらわす図です。まず、①現状理解を行い、②現状を体系的に捉えられるように現状に至るまでのプロセスを振り返ります。①と②を繰り返すことにより、③自大学の学生、教員、大学、地域のありたい姿が浮き彫りになります。即ち、解決すべき課題、取り組むべき目標が明らかになります。目標が定まると、④大学教員として、どのように一歩を踏み出すかというアクションの段階へ進みます。以上のサイクルは教員個人のみならず、組織としても活用することが可能です。

平成30年度の看護学教育ワークショップでは、この看護学教育CQIモデルver. 1を用いて、自大学の組織を分析するワークを行いました。ワーク後の全体討議では、次のような声が挙がりました。

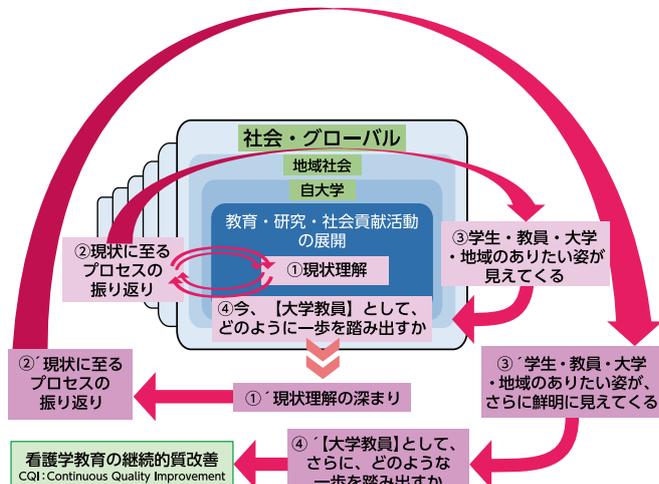
「それぞれの教員が同じ方向を向くことが大事だ、ということの共通性を感じました」

「日々多忙な仕事の中で埋没してしまいそうで、大学がその地域にある意味はややもすると忘れがちですが、このワークショップで、改めて原点に戻って、大学が本当に社会に貢献していくためにはどうあるべきなのかを考える非常に貴重な機会になりました」

当センターでは、今後も引き続き、協力が得られた大学、教員、学生の現場における実践の成果によって、看護学教育CQIモデルを検証・洗練していきます。



看護学教育CQIモデルVer.1  
図1：看護系大学教員としての自己の立ち位置を見極めるための構造図



看護学教育CQIモデル Ver.1  
図2：看護学教育の継続的質改善に向かう思考の方向性をあらわす図

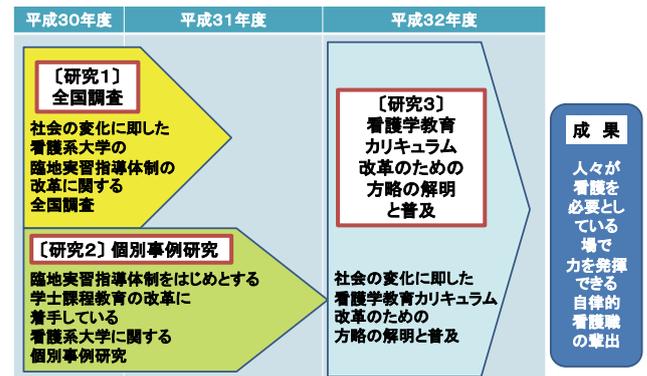
## 大学における医療人養成の在り方に関する調査研究事業 － 学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究－

当センターでは、今年度より新たに、文部科学省調査研究委託事業「大学における医療人養成の在り方に関する調査研究－学士課程における看護学教育の質保証に関する調査・研究－」（平成30～32年度）を受託し、研究を開始しました。

地域包括ケアシステムの構築が進むにつれ、患者の療養の場は、病院から、ケア施設や自宅へと大きく変化しつつあります。それに伴い、看護職に期待される役割も、従来の病院に入院している患者への看護のみならず、外来通院しながら自宅で療養する患者を支援する役割、地域のケア施設などの非医療機関で介護・福祉職と連携しながら看護を展開する役割、患者の自宅へ訪問し看護を提供する役割、さらに、各地域のニーズに即したケアサービスのあり方を探索し、新たなケア資源を開発し、地域包括ケアシステムを発展させる役割へと、ますます拡大してきています。

この研究プロジェクトは、看護系大学が、このような社会の変化に即して、臨地実習指導体制をはじめとする学士課程カリキュラムを改革し、その改革に基づいて教育を展開し評価する体制を、自大学の内部に構築する方略

を解明し、普及することを目的とし、当センターが、宮城大学・新潟青陵大学・横浜市立大学・鳥取大学・熊本保健科学大学と共同で実施します。3年間の取り組みの概要は以下の図のとおりです。平成30年度は、〔研究1〕〔研究2〕の2つの看護系大学を対象とした研究を開始しますので、是非、ご協力ください。



図：本調査研究委託事業における3年間の取り組みの全体像

## 看護学教育ワークショップ



平成30年度看護学教育ワークショップは、教育の質改善に関する各大学の状況をより客観的にとらえ、特徴を大切にしながら課題を解決できるよう、「自大学の強みや使命を活かすCQI－自大学をとらえなおす・CQIへのエネルギーを得る」をテーマに、平成30年10月29日（月）～10月30日（火）の2日間、千葉大学けやき会館を会場に開催しました。

グループワークを含めた2日間コース（全日程）に57名、半日コース（講演と報告の部）に45名の計102名の看護系大学教員が参加しました。

初日は、文部科学省高等教育局大学振興課専門官・多田典史氏からの挨拶に引続き「講演と報告の部」が開催されました。「講演と報告の部」では、当センターが平成28年度から取り組んでいる『CQIモデル開発と活用推進プロジェクト』の「CQIモデル Ver.1」を当センター教員から報告した後、杉田由加里文部科学省高等教育局医学教育課看護教育専門官から「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの策定と活用」と題した講演が行われました。続いて、当センターの教員から、「外部指針をCQIにどの

ように使うか」と題した報告を行った後、熊本保健科学大学の中村京子教授、荒尾博美准教授より「FD 企画者研修からの学び 見かたが変わる!」と題し、自大学の捉え方の変容およびCQIの新たな方略について報告が行われました。

続く29日午後～30日には、2日間コース参加教員が5～6人の少人数グループに分かれ、自大学のCQIの推進の方策を導くためのグループワークを行いました。グループワークでは、各参加者が自大学の置かれた状況及びその歴史についてお互いに紹介し合い、自大学でCQIを推進する上で必要なこと・課題および解決の方策等について検討しました。最後に、全員で討議の内容を発表・共有し、自大学に関する新たな見方とCQIに向かうエネルギーを得、さらに、教員同士の相互支援の必要性と効果を確認することができました。



## 国公立大学病院副看護部長研修



国公立大学病院副看護部長研修は、日本の医療の現状を踏まえて、大学病院の上級看護管理者として自施設の組織変革に向けたビジョンを明確にし、その実現に向けた計画を立案・実施・評価することを通して、上級看護管理者

者として必要な実践の能力を高め、大学病院の看護の充実を図ることを目的とし、平成18年度から毎年実施しています。

国公立大学病院の看護管理の機能強化に向けたStaff Development (SD)として位置づけられます。平成30年度は、20名の国公立副看護部長を迎え、1年間を通して自施設で取り組む各自の実践計画に沿った組織変革プロジェクトを推進しました。千葉大学の当センターでは、3期に分けた分散型集合研修Ⅰ～Ⅲを受講生に提供しました。研修Ⅰは大学病院の高度実践看護管理者として必要となる最新の学際的知識を学び、研修Ⅱは課題解決に向けた演習およびプレゼンテーションスキルの演習などから小グループのダイナミクスを活かした学習、研修Ⅲは実践報告会を実施しました。年間を通して、センター教員からの継続した指導および、全国から集まった研修生相互の交流から、実践力が高められるようシステム化されています。大学病院における看護管理の今日的課題と実践知がまとめられた実践報告書は、研修生の同意を得てセンターのデータベースと図書館リポジトリへ登録されますのでご活用ください。

## 看護管理者研修

近年の医療制度改革において、急性期病院は、限られた在院日数で効果的に医療を提供し、速やかに地域での生活に戻るよう支援する役割が求められています。看護管理者研修は、看護師長等、現場の看護に責任を持つ職位にある、国公立大学病院をはじめとする急性期病院の看護管理者が、医療提供体制の変化に対応した複雑かつ重要な課題を組織的に解決する能力を開発することを通して、看護本来の役割発揮を支援することを目的として、毎年開催しています。

今年度は、全国から102名の看護師長相当の看護管理者が集まり、平成30年9月26日(水)～9月28日(金)の3日間、千葉大学看護学部を会場に開催しました。文部科学省医学教育課から大学病院支援室宇野専門官、厚生労働省看護課から後藤課長補佐、元日本看護協会長の坂本氏、退院支援の専門家宇都宮氏など総勢9名の多彩な講師陣で構成された講義では、少子高齢社会における人々の健康と生活の充実のために、いかに現場の看護管理者の役割発揮が重要であるかを再認識できました。また、今年度は新たな試みとして、各講義の前後に学びの共有と確認の時間を設け、参加者同士の交流の時間を持ちました。全国の看護管理者間の良いネットワークの形成ができたと思います。



## 看護学教育指導者研修



現在、毎年約10校のペースで大学の新設が続いており、次世代の看護職を育成する上で、地域の様々な保健医療施設と看護系大学の連携の重要性が高まっています。看護学教育指導者研修は、看護学生の看護実践

を直接指導する臨地実習施設所属の看護職が、社会の変化に即した看護学教育を行う上で必要な視点を養い、臨地実習施設と看護系大学の更なる連携・協働により、社会が求める次世代看護職の育成に資することを目的として、毎年開催しています。

今年度は、全国から38名の看護系大学の臨地実習施設所属の看護職の皆様を研修生として迎え、平成30年8月22日(水)～8月24日(金)の3日間、千葉大学看護学部を会場に開催しました。初日は看護高等教育行政の動向、看護学教育の基礎、看護における成人教育のあり方を学び、2日目からはグループワークを行い、上手いかなかった教育指導実践の事例をいかに教育のチャンスとして教材にしていくかをグループで検討、その検討結果を使ってロールプレイング学習を深めました。昨年度から、臨地実習施設と看護系大学の更なる連携・協働に向け、看護系大学FD企画者研修の参加者にもグループワークにご参加いただいています。今後は、さらに有効な研修へと発展させていきたいと考えております。

## 看護系大学FD企画者研修

本研修は、昨年度から新規事業として開催している看護系大学教員を対象とした研修です。目的は、組織分析を通して自大学の課題を特定し、看護および看護学の特質を踏まえ、自大学の実情に見合った体系的なFD (Faculty Development) を企画・実施・評価できるFD企画者(FDer)としての能力を身につけることです。2名5組の募集としたところ、多数の大学から応募があり、研修効果が高いと思われる5大学10名を選考させていただき、実施しました。研修Ⅰは、FDマザーマップ等の看護学教育の体系的FDに資する情報提供の後、各大学の組織状況とそれに応じたFD企画についてディスカッションを行い、企画立案を課題としました。研修Ⅱは、看護学教育実習指導者研修へのファシリテータ参加形式の演習とし、前後に立案中のFD企画について実施方略を含めた情報交換を行いました。今後予定されている研修Ⅲでは、各大学の立案したFD企画の実施、評価の経過報告を行い、FDerとしての能力開発へのフィードバックを行うこととしています。



看護学教育研究共同利用拠点

発行

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

〒260-8672 千葉県千葉市中央区亥鼻1-8-1 U R L : <https://www.n.chiba-u.jp/center/>  
TEL : 043-226-2464・2378(看護学部事務部) E-mail : [nursing-practice@office.chiba-u.jp](mailto:nursing-practice@office.chiba-u.jp)

撮影協力/千葉大学写真部